



日本ボート・オブ・ザ・イヤー2020 最終選考

◆ 飯田 章 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

ガレオン 460 を選ばせて頂きました。サロンクルーザーのお手本になる様な新しい発想や遊び方を提案してくれている素晴らしいボートだと思います。日本の海での走破性も許容範囲内であるし性能機能を満たしてくれるいいクルーザーだと評価いたしました。

◆ 石崎 理絵 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

ボートがアトラクションみたい(笑)ビーチモードに360度回転するシートと、遊び心が満載でボートでの時間が一層楽しくなる。サイドウインドウを開いてバーカウンター使いは大人が喜び。

一方、スイムステップが下がることで、水遊びもできて、子供も喜びそう。幅広い年齢が楽しめるボートだと思います。広すぎるデッキも海を独り占めしてる感があって良いですね。乗ってみたい!!!

◆ 薄 雅弘 選考委員 SUPREME ZS212 (センチュリオンボートジャパン)

ウエイクボード&ウエイクサーフィンをフルに楽しむには、乗り手のスキルも重要だが何よりもボートの持つステアリング性能とウエイク性能が何よりも重要である。

その点が、全世界で評価されオーダーが殺到し受注ストップが掛かるほどの評価を得た SUPREME ZS212 を日本ボート・オブ・ザ・イヤー2020 に選考選考した。

◆ 大場 健太郎 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

ポーランドのボートビルダーが建造するガレオンヨットは、ヨーロッパアンテイストあふれる斬新でモダンなクルージングファミリーボートとして、最近ヨーロッパを中心に人気急上昇中だ。ガレオンヨットには、30 フィートクラスから 80 フィートまで幅広いサイズと、フライブリッジのコンセプトによっても他社にはない特徴的なモデルが存在する。

GALEON 460 FLY は、先行して発売された 510 スカイデッキと基本的に同じコンセプトで造られているが、フライブリッジはオープン仕様となる。

特にビーチモードという油圧の可動式サイドデッキはサイドコーミングの一部が海上に張り出し、アフトデッキと一体になり余裕のスペースを確保、開放的なくつろぎの空間を演出する。特にポート側サイドデッキは、ギャレーカウンターと向かい合わせにツールがセットでき快適で楽しく過ごせるお洒落な空間を生み出す。

また、現代的なデザインとゴージャスな内装も、ひととき至福のひと時を味わわせてくれる。特にミジットのオーナーズルームは、船幅いっぱい広く、落ち着いた雰囲気快適なプライベートスペース生み出している。

フライブリッジには、サンベッドはもちろんバーベキューコンロやミニバーも装備でき、友人やファミリーなどとの楽しいひとときを演出してくれる。

定評ある走行性能と合わせて、マリンライフを満喫できる最高のシチュエーションを提供してくれる一艇として大いに評価できる。



日本ボート・オブ・ザ・イヤー2020 最終選考

◆ 岡本 一明 選考委員 MJ-GP1800R SVHO (ヤマハ発動機株)

GP1800R の特徴は、ハイパワーなエンジン出力に対して、船体が軽量コンパクトというパッケージングにある。

このマリッジットに乗ると、真っ先に感じるのが「速い」だ。スピード感や恐怖感、それに伴う緊張感が、他のジェットと全く違う。

大海原をアクセル全開で走っても、水面状況による挙動の変化が敏感に感じ取れる。俊敏さとそれに伴う緊張感が半端ではない。まさにリアルスポーツである。

「リアルスポーツなジェット」とは、乗り手のスキル次第で走りが変わる。ライディングスキルの差が如実に表れる乗り物である。アクセルを開ければ誰でも乗れるが、このマシンのポテンシャルを本当に楽しめたかったら、ライディングが上手くなるしかないのだ。

これだけ、純粹に走りを楽しめるランナバウトは他にはないと思われる。

◆ 小倉 修 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

艇の性能は高く、細部の作り込みも丁寧でインテリアの質感にも優れる。デザインや機能面でもメガヨットのトレンドをしっかりと取り入れている進取の姿勢が感じられる。冷蔵庫にグリルも備えた広いフライブリッジ、カウンターテーブルに変身するビーチモードにアフタデッキには 360 度回転のソファテーブルなど、船上で過ごす時間が楽しくなるボート

◆ 粕谷 俊二 選考委員

残念ながら、今回ノミネートされたボートの中に、ボートオブザイヤーへ推挙できるものが見当たりませんでした。理由は、どれも表面的な変化はあれど、基本設計は古く、旧態依然とした効率の低い環境性能は、もはや時代遅れの一言、楽しければいい、そんな時代は終わったと思うは自分だけだろうか。来年は、思わず唸るようなデザイン、そして何よりも環境性能を最優先に、数値に表れる革新的な設計、先進性能を備えたボートのエントリーがあることを期待しております。

◆ 川辺 一雅 選考委員 SUPREME ZS212 (センチュリオンボートジャパン)

マリンスポーツのニューウェーブ「ウェイクサーフィン」を盛り上げる艇として SUPREME ZS212 を高く評価し、同種の艇が国内メーカーからも発売されることを願います。

それにつけても、国内メーカーによる新艇の発表が少なく、あったとしても、そこに新たな提案が皆無なのはさみしい限りです。国内メーカーには、とくに中型艇の充実を望みたいところ。世の貧富の二極化を反映するように、近年の大型艇の進歩はめざましく、日本でもそれなりの艇数が売られています。しかし、アッパーミドル層にとってリーズナブルで魅力的な選択肢が豊富にあってはじめて、ボートینگの魅力は社会に浸透していくものでしょう。輸入艇ばかりが目立つなかであって、国内メーカーのいっそうの奮起を期待します。



日本ボート・オブ・ザ・イヤー2020 最終選考

◆ 喜多嶋 隆 選考委員 Chris Craft Catalina 34 (クリスクラフトジャパン)

今回の候補艇の中で唯一ライフスタイルを感じさせる艇だから。

◆ 木下 隆之 選考委員 EX28C (ヤンマー船用システム㈱)

真摯な姿勢でフィッシングボートとしての資質を高めた点を高く評価しました。

◆ 九島 辰也 選考委員 SUPREME ZS212 (センチュリオンボートジャパン)

ウェイクサーフィンやウェイクボード用の優れた波をつくるのはもちろんですが、Z シェイプのボディはカッコよく、カラーリングを含めこのスタイリングからボートに興味を持ってくれる人が増えそうな気がします。また、タワーと呼ばれる部分のデザインもよく、全体のイメージを壊しません。オプションのボードラックはデザインだけでなく、回転するなどして実用性が高いのも見どころです。この他にはタッチスクリーン式モニターやデザイン性の高いスピーカーを持つサウンドシステムなどもこのボートの魅力を引き立てます。このジャンルのトレンドを鑑みても高く評価できると思います。

◆ 楠田 武治 選考委員 Chris Craft Catalina 34 (クリスクラフトジャパン)

Chris Craft 社製造の高性能ボートで、美しいクラシックスタイルのデザインが素晴らしい。高い品質なマリンビニールとチークのデッキも心地良い。パウピットのU字型ラウンジに乗員を乗せられる構造で、家族や友人とクルーズを楽しめるボートであるから。

◆ 国沢 光宏 選考委員 EX28C (ヤンマー船用システム㈱)

フィッシングボートは日本で人気のジャンル。EX28C は 28 フィート級で珍しいシャフトドライブ。係留保管するならベストだと思う。搭載されるエンジンもパワフルなので快適なクルーズを楽しめることだろう。何より水線長を可能な限り長く取れるハル形状が新しい。パウバースやトイレも付いてり、様々な使い方が出来ると思う。このハルを使い、ぜひクルージングボートを作って欲しい。

◆ 佐藤 久実 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

サイドデッキが開いたり、デッキテーブルが 360° 回転したり、ビッチモードが斬新。ピラーが細く、ガラス面積が広くて開放的なキャビン、収納スペースなどディテールに至るまでアイデアが満載されている。その一方、30 ノットでも風に強く安定した走りも魅力。

このように、欧州のトレンドの最先端に行く GALEON 460 FLY を評価しました。



日本ボート・オブ・ザ・イヤー2020 最終選考

◆ 鈴木 亜久里 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

停泊中に後方のデッキが両サイド開くところがとても気に入りました。このような仕様は現在主流ではありますが、広いスペースを確保出来る GALEON 460 FLY は開放感もあり、くつろげる雰囲気があると感じ選びました。

◆ 鈴木 光司 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

海に浮かぶバルコニー。アイデアが斬新で魅力的。

◆ テリー伊藤 選考委員 EX28C (ヤンマー船用システム㈱)

大海原で夢のある GALEON 460 FLY と迷ったのだが、今回はフィッシングに使いやすい EX28C に 5 点を入れました。

ただ、SUPREME ZS212 の「ウエイクサーフィン」がやれる！！時代を造れそうなので、今後に期待したい。

◆ 永井 潤 選考委員 EX28C (ヤンマー船用システム㈱)

日本式フィッシングボートの特性はよくわかっているつもりだが、実は多用途に使えるポテンシャルがあると思っている。より完成度も高くなった最新の日本式フィッシングボートを 1 位とした。

◆ 野村 敦 選考委員 Chris Craft Catalina 34 (クリスクラフトジャパン)

昨シーズン、私がシートライアルを行ったボートの中でも Chris Craft Catalina 34 は出色のできばえ。300 馬力アウトボードを 3 基搭載するモンスターボートながら、見た目とは裏腹にとっても素直な走りを見せてくれた。Chris Craftらしいきめ細かな仕上がりも好印象。Chris Craft ではおなじみのランナバウトタイプとは違ったデザインテイストだが、やはりそのアイデンティティは受け継がれている。次点は YANMAR の EX-28C を推薦。釣り機能に注目が行きがちだが、実は走りが素晴らしい。かなり印象に残ったボートだった。

◆ 平井 大介 選考委員 Chris Craft Catalina 34 (クリスクラフトジャパン)

クリスクラフトの製品は、マリーナでもひと際目を惹くデザインと色使いが魅力的だと常に思っております。カタリーナ 34 も同様に、剛性感の高さと走りのよさにより選考委員の中でも評判が高く、1 位に選考致しました。またガレオン 460 フライの作りこみとデザインの高さ、新たなトレンドの中にあるシュープリーム ZS212 もそれぞれ、高い評価を受けるべき製品だと感じております。



日本ボート・オブ・ザ・イヤー2020 最終選考

◆ 山崎 憲治 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

メガヨットの最新トレンドを惜しげもなく取り入れた姿勢に共感する。オープンガンネルのビーチモードや回転するコクピットシート等随所に様々なアイデアと細やかな気遣いが実践されている。近年先端的なプレジャーボートの建造で注目を集めるポーランド生まれ、高剛性ハルと相まって走破性能も好評価。このボート、マリタイムの楽しさを広げるメッセージャーになると思う次第。

◆ フェルディナント・ヤマグチ 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

走って楽しく、係留して楽しいナイスな船。舟遊びを知り尽くしたビルダーが放つ、遊び心満載の名庭です。これを入り江に浮かべてノンビリ過ごしたいです。

◆ 古屋 佳也 選考委員 SUPREME ZS212 (センチュリオンボートジャパン)

世界的に人気沸騰中のトーイングスポーツ「ウェイクサーフィン」。そのウェイクサーフィンをするために建造されたスペシャルボートが SUPREME ZS212。21 フィートでありながら、ワールドクラスのパワーあるウェイキを作り出し、サーフィンをエンドレスで楽しむことができる。また、ラグジュアリーなセンチュリオンのセカンドブランドでもある SUPREME ZS212 は、シンプルなスポーツタイプ。コストパフォーマンスが高い。

◆ 堀江 史朗 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

広がるデッキスペース、回転式のパッセージシートなど、サイズを超えた楽しみ方ができるような工夫が凝らされている。

◆ 吉田 由美 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

今期、試乗したボートの中で、最もわくわくしました！
アイデア満点の装備にボートライフの夢が拡がり、新しい可能性を感じます。

◆ 依田 新 選考委員 GALEON 460 FLY (㈱スローボート)

大型艇というのは高価ゆえ、新しいトレンドを取り入れたり、自分のワガママをかなえてくれるのが最大の魅力。そんな大型艇ならではの様々な夢を新しい形で叶えようとしている点を評価します。